学校評価実施報告書　　翔鸞　　幼稚園

中間評価

学校関係者評価

評価日	令和8年10月19日	評価者	平松美和

3　幼稚園教育の計画

目標の実現に向けた具体的な取組の結果を検証する指標の結果を記載するとともに、自園での分析、分析をふまえた取組の改善、取組の改善を検証するための指標について記述してください。

具体的な取組（年度当初）	各種指標の結果
子どもが主体的に遊ぶ姿を重視する保育について ①「直接体験を通して不思議に思う・気付く・分かる経験」 ・自然・物・人との関わりの中で、試す・比べる・工夫する経験を重ねる ・実体験やイメージの世界を行き来しながら、遊びや生活に結び付いた様々なことに対して心を動かす（不思議に思う、気付く、分かる経験） ＜具体的な取り組み＞ ＊園庭・地域の自然を生かした季節の遊び（虫探し、栽培、色水・泡・水・砂遊び） ＊素材コーナーの常設（かく、つくる等） ＊５歳児保育室の研究所コーナー（調べる、比べる、育てる等） ②「遊びを通して考え、工夫し、伝える経験」 ・友達や教師との対話を通して、自分なりの考えをもつ ・言葉・身体・かいたりつくったりなど多様な表現方法を選び、表現する ＜具体的な取り組み＞ ＊遊びの中や日々の振り返りの場での「どうして？」「次はどうする？」の対話 ③「折り合いを付け、共に遊ぶ・生活する経験」★ ・自分の思いを大切にしながら、相手の思いにも気付く ・葛藤場面を通して、自分の気持ちと他者の気持ちと向き合い、折り合いをつける、協働する喜びを味わう★ ＜具体的な取り組み＞ ＊少人数園の特性を生かした異年齢交流 ＊トラブルを大切に受け止め、気持ちの代弁と話合いを大切にする援助 ★ ＊発達障害等のある幼児、日本語以外を母語とする幼児も安心できる環境・関わりの工夫	①アンケートでは、「いろいろなことに興味を持って聞いたり行動したりする」「すごいね、ふしぎだね、やったーなどと感動している」の項目に対して、多くの保護者から肯定的な評価を得ることができた。自由記述でも、「いろんな事に興味を持ち、試してみようとチャレンジするようになった」「たくさんのことに挑戦し、色々なことに気付き、自分なりの考えをもって行動している」などの声が寄せられた。園庭や地域の自然に親しみながら遊ぶ経験や、素材コーナー、研究所コーナーなどの環境を通して、子どもたちが不思議さや面白さを感じ、自ら試したり比べたりしながら学びを深めていることがうかがえる。 ②アンケートでは、「自分の思いを話そうとしている」の項目について高い評価が見られた。また、保護者からは「自分なりの考えをもって行動している」「子どもの持っている力を発揮していると感じる」といった意見も寄せられた。日々の遊びや振り返りの中で、「どうして？」「次はどうする？」と対話を重ねることで、自分なりの考えをもち、言葉や表現活動を通して伝えようとする姿が育っていると考えられる。今後も子ども同士や教師との対話を大切にしながら、考える力や表現する力をさらに育んでいきたい。 ③アンケートでは、「友達や物などを大切にしようとしている」「子どもは相手を意識したり思いやったりする方向に発達している」の項目について、多くの保護者から肯定的な評価を得ている。また、「優しい心が育っている」「動物や植物、友達を大切に思う気持ちが育っている」などの記述も見られた。少人数園の特性を生かした異年齢交流や、トラブル場面を丁寧に受け止め、互いの思いを伝え合う援助を積み重ねてきたことで、自分の思いを大切にしながら相手の気持ちにも気付き、共に生活する力が育っていることがうかがえる。一方で、あいさつや友達との関わりについては一部に課題を感じる回答も見られるため、引き続き一人一人の思いに寄り添いながら、安心して関わり合える環境づくりに努めていきたい。
支援が必要な子どもへの教育について ・子どもたちの特性や発達等の実態を把握し、ねらいや計画を立て、教職員や保護者、関係機関と連携をとりながら、一人一人に適した指導を行う。 ・保護者と共に個別の指導計画を作成し、学期ごとに面談を行いその都度見直しをしていく。個別の指導計画をもとに、実践を積み重ね、よりより指導や援助につなげていく。 ・互いの良さを認め合い、教師の関わりが他児へのモデルとなってクラスの大切な仲間であることを感じられるようにする。	・担当教員が保護者や関係機関と連携を図っていく中で、支援の必要な子どもたちの育ちを共有することができたり、支援の方法を共に考えたりしていくことができた。また、育ちを共有することで保護者自身が子どもを肯定的に認めることができるため、子ども自身も自己肯定感が高まり、自信を高めていく姿が見られる。 ・保護者と共に個別の指導計画を作成していく中で、具体的な支援を共有することができ、園と家庭が同じ方向を向いて関わることできている。 ・5歳児クラスになると、支援の必要な子どもの困りを理解し、受け止めながら、関わっていく姿が見られる。クラス内で要支援の子どもを温かく受け入れなが
幼保小の架け橋プログラムの推進について	・幼稚園の公開保育においては、翔鸞小学校の教員が

・幼稚園が公開保育を行ったり、小学校が公開授業を行ったりしながら実際に子ども達の様子を見た上で事後協議を行い、互いの保育や教育について理解しあえる場を設ける。また、その際には北野保育園にも声をかける。 ・ねらいをもって子ども達同士の交流活動ができるように年間の予定をたてていく。 ・互いの教育や子どもたちの理解をするために保育や授業を一緒に行うために、教員間で連携をとりよりよい交流に繋げていく。 ・小学校・北の保育園と合同の研修会を行い、架け橋プログラムを取り組む中での子どもたちの育ちについて共有していく。	積極的に参観し、保育後には感想や質問を交流する機会を設けることができた。その中で、遊びの中で育まれている子どもの学びや育ちについて具体的に伝えることができ、幼小接続に向けた相互理解を深めることにつながった。 一方、北野保育園との連携については十分な取組を進めることが難しい状況があり、今後は幼稚園が結節点となって積極的に働きかけ、交流や情報共有の機会を充実させていく必要がある。 また、小学校の公開授業への参加については実現できておらず、校種を超えた学びの連続性を理解する機会として課題が残った。今後は公開授業等の機会を積極的に活用し、小学校教育への理解を深めるとともに、幼児期の学びとの円滑な接続に生かしていきた
預かり保育について ・預かり保育に関わる担当教員や総合育成支援員、預かり保育ボランティアが午前中の保育の内容や個々の心身の状況、保護者の思いを把握できるように連携する。一人一人の子どもたちが安心安定した気持ちで預かり保育での生活や遊びをつくり出せるようにする。 ・預かり保育中の様子を保護者に伝え、預かり保育に対する安心感につながるようにつないでいく。	・アンケートでは、「なかよしひろば（預かり保育）を安心して活用している」「子どもは、なかよしひろば（預かり保育）で楽しく過ごしている」の項目について、多くの保護者から肯定的な評価を得ることができた。 また、自由記述からは、「預かり保育も楽しいようです」「安心して子どもを預けられている」「先生に対して絶対の信頼があり、安心して子どもたちを預けられている」などの意見が寄せられており、子どもたちが安心して過ごし、保護者も信頼感をもって預かり保育を利用している様子がうかがえる。 これは、担任を始め、預かり保育担当教員や総合育成支援員、預かり保育ボランティアが、午前中の保育内容や一人一人の心身の状況、保護者の思いについて情報共有を行いながら連携してきた成果であると考えられる。　　また、預かり保育中の子どもの様子を保護者に丁寧に伝えることで、家庭との信頼関係を深め、安心感につなげることができた。保護者からは、「子どもの様子について気になる点もきちんと共有してくれる」「園での様子を知ることができ、成長を感じている」といった声も寄せられている。 今後も、預かり保育に関わる職員間での情報共有をより一層充実させるとともに、一人一人の子どもの実態や保護者の思いに寄り添った関わりを大切にしながら、安心して過ごせる預かり保育の環境づくりに努めていきたい。
子育ての支援について	今年度は、未就園児親子クラスへの新規登録者が増

・上京児童館や小規模保育施設、子育てルームなど、地域の子育て支援施設に翔鷺幼稚園での取組や未就園児クラスの活動を伝えたり、幼稚園に直接遊びに来ていただいたりしながら、地域の子育て支援につなげていく。 ・子育てに悩みを抱える保護者に対して適切なアドバイスをしたりキンダーカウンセラーにつないだりなど支援体制をつくる。 ・教師と保護者がよい関係を築いたり、保護者同士をつなぐ行事や活動を取り入れたりする。	加している。保護者との日々の対話の中からは、在園児保護者から本園の保育や子どもたちの育ちの様子を聞き、興味や関心をもって参加につながっていることがうかがえる。アンケートにおいても、「安心して子どもを預けられる」「先生が保護者の話をよく聞いてくれる」「子どもの様子を丁寧に伝えてもらえる」など、園への高い信頼感が示されており、こうした保護者同士のつながりや口コミが未就園児親子クラスへの参加につながっていると考えられる。 　また、未就園児親子クラスでは、親子が安心して過ごせる場を提供するとともに、保護者同士や園とのつながりを築くことができている。子育てに関する相談や情報交換の機会を通して、保護者の不安や悩みに寄り添うなど、直接的な子育て支援の充実につながっている。 　さらに、満３歳児子育て支援クラスの利用者も増加している。幼稚園での生活や遊びを早い段階から経験することで、子どもたちが安心して園生活に親しむ機会となるとともに、保護者にとっても幼稚園の教育・保育への理解を深める機会となっている。今後も未就園児親子クラスや満３歳児子育て支援クラスの充実を図り、地域に開かれた子育て支援の拠点としての役割を果たしていきたい。 　キンダーカウンセラーによるカウンセリングの利用を通して、保護者自身の安心感が育まれている。保護者とのカウンセリング後のカンファレンスにおいて、子どもの見取り方、保護者への関りを教えていただき、教員にも安心感が生まれている。

自己評価

分析（成果と課題）

① 子どもが主体的に遊ぶ姿を重視する保育について

【成果】

子どもたちは園庭や地域の自然、素材コーナー、研究所コーナーなどの環境の中で、自ら興味や関心をもったことに主体的に関わり、不思議さや面白さを感じながら試したり工夫したりする姿が見られた。保護者アンケートでも、「いろいろなことに興味をもって聞いたり行動したりする」「感動したり不思議に思ったりする」「自分の思いを話そうとしている」などの項目で高い評価を得ており、教育目標である「夢中になって遊ぶことを通して学ぶ姿」が育っていることがうかがえる。自由記述からも、「試してみようとチャレンジするようになった」「自分なりの考えをもって行動している」といった声が多く見られた。また、少人数園の特性を生かした異年齢交流や丁寧な対話を積み重ねることで、相手を意識したり思いやったりする姿も育ってきている。

【課題】

一方で、「あいさつができている」「友達との関わり」については一部肯定的評価が低い回答も見られた。少人数園であるため安定した人間関係が築きやすい反面、多様な考え方に触れながら折り合いを付けたり、自分の思いと相手の思いを調整したりする経験が十分とは言えない面もある。今後は異年齢交流や地域との関わりをさらに充実させ、より多様な人との関係性の中で自己表現や協働する力を育てていく必要がある。

② 支援が必要な子どもへの教育について

【成果】

保護者や関係機関と連携しながら個別の指導計画を作成し、子どもの実態に応じた支援を進めることができた。支援方法や育ちの姿を共有することで、保護者が子どもを肯定的に捉えるようになり、子ども自身も自信や自己肯定感を高めている様子が見られた。また、クラス全体としても支援の必要な子どもを理解し受け入れる雰囲気が育っており、互いの違いを認めながら仲間関係を築く姿が見られるようになってきたことは大きな成果である。

【課題】

支援を必要とする幼児や外国にルーツのある幼児の在籍は年々増加しており、さらに一人一人に応じた支援体制の充実が求められる。保護者、関係機関との連携を継続するとともに、教職員全体で支援方法を共有し、どの職員も同じ方向性で関われる体制づくりを強化していく必要がある。

③ 幼保小の架け橋プログラムの推進について

【成果】

翔鸞小学校教員による公開保育への参観や事後アンケートを実施し、幼児期の遊びの中で育つ資質・能力や学びの姿について具体的に共有することができた。これにより、幼小双方の理解が深まり、接続期の教育に対する共通理解を進めることができた。また、アンケートでも「小学校との交流・連携は子どもの育ちにつながっている」という高い評価が見られ、保護者も幼小接続の取組を肯定的に受け止めていることがうかがえる。

【課題】

分析をふまえた取組の改善（改善の必要な取組について記載）

① 主体的な遊びの充実と協働する力の育成

子どもたちが主体的に遊びを深める姿は育っているため、その姿を継続して支えるとともに、異年齢交流や地域との交流を意図的に増やしていく。遊びの振り返りや話合いの機会を充実させ、自分の思いを伝える力だけでなく、相手の考えを受け止めながら折り合いを付けて協働する力を育んでいく。

② 支援体制の充実

支援を必要とする幼児や外国にルーツのある幼児の増加を踏まえ、保護者や関係機関との連携を継続するとともに、教職員間で支援内容や指導方法について共通理解を図る。一人一人の実態に応じた支援を組織的に行い、安心して園生活を送ることができる環境づくりを進める。

③ 幼保小連携の推進

翔鸞小学校との連携を継続しながら、小学校公開授業への参加や情報交換の機会を増やし、幼児期から学童期への学びの連続性について理解を深める。また、北野保育園との交流や情報共有を進め、幼保小が連携した架け橋プログラムの充実を図る。

④ 預かり保育の質の向上

預かり保育に関わる職員間の情報共有をさらに充実させ、一人一人の子どもや家庭の状況に応じたきめ細かな支援を行う。また、預かり保育中の子どもの姿や成長を保護者に丁寧に伝え、さらなる安心感と信頼関係の構築につなげていく。

⑤ 地域とつながる子育て支援の充実

未就園児親子クラスや満３歳児子育て支援クラスを充実させるとともに、上京児童館や地域の子育て支援施設との連携を強化する。保護者同士のつながりや相談しやすい環境づくりを進め、地域全体で子育てを支えるネットワークの充実を図る。

（最終評価に向けた）改善した取組を検証する各種指標

指標は変わらない
学校(幼稚園)関係者による意見・支援策
・「周りの人に挨拶ができている」のアンケート結果が毎年評価が低くなっている。この評価を保護者自身が受けとめて、家庭の中で「おはよう」「おやすみなさい」「ただいま」「いただきます」などの当たり前の挨拶が親子関係の中でできているのかをしっかりと見直していくことが大切である。それがしっかりできてくることで、自然と家庭外でも挨拶ができるようになるのだと思う。 ・運動会での子どもたちの様子を見ていると、子どもたち自身が主体的に楽しみながら運動会に参加している様子が見られた。子どもが、大人の顔色を見ながら動いていなかった。楽しみながら様々なことを学んでいるのだと感じた。 ・少子化が進んでいく中、危機感をもって運営をしていかなくてはいけないのではないかと考える。

4　教職員の働き方改革について

重点目標

・教職員一人一人が勤務時間を意識し、保育終了後の時間を計画的に、有効に使い、教材研究や事務処理を行う

具体的な取組（年度当初）	各種指標の結果
・毎週水曜日は「ノー残業ディ」に位置づけ、定時に帰宅するように努める。 ・電話応対時刻を午後６時までとする。 ・帰宅を促し、午後７時頃施錠できるように努力する。 ・年休や割振り、回復が取れるように長期休業中の取組を精選する。 ・校務支援員と連携を図りながら、教頭や担任の仕事の一部を補助してもらいやすいよう計画する	① 毎週水曜日の「ノー残業デー」の取組について 定時退勤を意識する教職員がいる一方で、業務量や行事準備等により定時退勤が難しい状況も見られることがうかがえる。 ② 電話応対時刻を午後６時までとする取組について 電話応対時間の設定は定着しつつあるものの、実際には業務対応や保護者対応等により十分に実現できていない場面もあると考えられる。 ③ 午後７時頃の施錠を目指す取組について 退勤時刻を意識する取組は進んでいるが、業務の集中する時期には勤務時間が長くなることもあり、継続した改善が必要である。 ④ 年休・割振り・回復取得の推進について アンケートの結果より、長期休業中の業務の精選や計画的な休暇取得を意識した運営が進められていることがうかがえる。 ⑤ 校務支援員との連携による業務改善について 校務支援員との連携により、担任や教頭の業務負担軽減につながっており、働きやすい環境づくりに一定の成果が見られる。

自己評価

分析（成果と課題）

教職員一人一人が勤務時間を意識しながら業務に取り組む意識は徐々に浸透してきている。特に、年休、回復休暇の取得に関する項目では肯定的な評価が見られ、長期休業中の業務の精選や計画的な休暇取得を進めることができていると考えられる。

また、校務支援員との連携については全ての回答者が肯定的に評価しており、教材準備や事務的業務の分担が進んだことで、教頭や担任の負担軽減につながっていることがうかがえる。教職員が子どもと向き合う時間や保育の準備・振り返りに充てる時間の確保にも一定の成果が見られた。

一方で、「ノー残業デーの実施」「電話応対時刻の徹底」「午後７時頃の施錠」については評価が分かれており、取組の実現状況には個人差が見られた。行事準備や保護者対応、支援を必要とする子どもへの対応などにより、勤務時間内に業務を終えることが難しい状況もあることが考えられる。

また、時間外勤務の縮減だけでなく、教職員が保育の充実や自己研鑽に意欲をもって取り組める「働きがい」と、安心して相談し支え合える「働きやすさ」の両立をさらに進めていく必要がある。そのためには、業務の優先順位の明確化やさらなる業務改善、教職員間で協力し合う体制づくりを継続して進めていくことが求められる。

分析をふまえた取組の改善（改善の必要な取組について記載）

① 業務の計画的な遂行と定時退勤の推進

ノー残業デーや午後７時頃の施錠について、取組の実現状況に差が見られたことから、行事準備や保護者対応等の時期を見通した業務計画を職員間で共有し、業務の平準化を図る。あわせて、優先順位を明確にしながら業務の精選を進め、勤務時間内に業務を終えられる環境づくりを推進する。

② 働きやすい職場環境づくりの充実

教職員が安心して休暇を取得できるよう、年休や、回復休暇の取得状況を定期的に確認し、互いに支え合える体制づくりを進める。また、日常的な対話を大切にしながら、業務上の困りや負担感を共有しやすい職場風土の醸成に努める。

③ 校務支援体制のさらなる充実

校務支援員との連携による業務軽減の成果を生かし、支援内容や役割分担を整理しながら、教材準備や事務作業等の効率化を進める。教職員が子どもと向き合う時間や保育の振り返り、教材研究の時間を確保できるよう、組織的な業務改善を継続して行う。

（最終評価に向けた）改善した取組を検証する各種指標

指標は変わらない
学校（幼稚園）関係者による意見・支援策
・子どもたちのために、地域としてできることをやっていきたいと考えている。少子化の影響もあり、教職員だけではまかなえない部分は、卒園児の保護者も一緒に楽しみながら取り組める体制づくりを整えていくことで、子どもたちにととって、良い経験につながっていくのではないかと考える。